

平成23年3月11日発生の東日本大震災（いわゆる3.11）は、未曾有の被害とこれまで当たり

現在日本が直面している最大の課題は、超少子高齢型人口減少社会が進む中、増田寛也元総務相を中心とした「日本創成会議」が公表した、東京一極集中による地方都市消滅の恐れへの対応です。これは、出生率の低い東京に若い人が集まることにより、少子化のスパイラルが起きていることに対する警鐘です。政府はその対策として、各地域がそれぞれの特徴を活かした自律的で持続的な社会の創生が可能となる「地方創生」に取り組みることとしています。

だ。山雅SCがようやく県サッカー界で認知された思い出深いシーズンとなった。

前としてきた「生き方」「価値観」が通用しないことや、「想定外」という言葉で片付けようとする原子力発電所の安全性神話の崩壊等、私たちの基本的考え方を見直す必要があるとの人類への警鐘でした。

人口減少時代における価値観



高26回 上條 一正

その結果、春の市民体育大会2位、国体県予選（8月）ベスト4、社会人サッカー県予選（9月）優勝、社会人サッカー北信越予選（10月）1回戦敗退という結果を残した。私は首都圏の大学在学中のため選手として出場できず監督として試合に臨ん

し、チームの主力として活躍している。松本山雅FCは、県陵サッカー部が立ち上げ、長野県社会人サッカーチームのトップの地位を築いたといっても過言ではない。



白虹会
2年 西風悠

言い換えれば地域における助け合いの気持ち（近所が近助）であり、地域に「絆」があったことからだと…。

これらの事象を見たうえで冒頭の「地方創生」を考えた時、「人口減少をネガティブに捉えない」「経済性において絶対経済での判断をしない」。そのために私たちは、社会に暮らす責任として、目先や自分のことだけで物事の価値判断をするのではなく、地域のこと、孫子の代に對して、今私たちに何ができるかを真剣に考えながら、自らが暮らす「まち」を創っていくことが大切です。そして、これらを共通理解として実行していくことが、この地域を暮らしやすく、住みやすくする「地方創生」に繋がっているのではないかと考えています。

（松本市建設部長）

「かりがねサッカー場竣工」



「広報部通信員」
高20回 上條 恒嗣

松本山雅FCを中核としたまちづくりを掲げ、スポーツを通じての健康寿命延伸都市を重点施策としている松本市。その一環として「かりがね運動場」がこの4月に開場となりました。この場所は以前「かりがね自転車競技場」として使用されていましたが、浅間温泉国際スケートセンター（平成22年閉場）跡地に移転新設されることになりサッカー場建設となりました。

この施設は、J1に昇格する松本山雅FCの練習拠点となるもので、3.6ヘクタールの敷地の中に天然芝のコート一面（約10580㎡・高さ約8mの防球ネット敷設）と人工芝のコート一面、間に管理棟が設置されています。天然芝のピッチに面したコート西側には高さ約2mの階段状の客席があり、近距離で練習の様子

や練習試合を観ることができます。また、松本山雅FCが出資してのクラブハウスも隣接地に設置されるようになります。

市民の中には出資金と併せ公金の投入に「公益性が無い」などとして反対する声もありましたが、管理する市スポーツ推進課では「松本山雅FCの練習拠点となると同時に中・高校生ら市民のサッカー環境の向上にもつながる」と期待しています。



白虹会
2年 中村紅映

